スイスの中石器および新石器時代の有柄銛

ハンス・ゲオルグ・バンディ
（ベルン）
丹　羽　百合子　訳

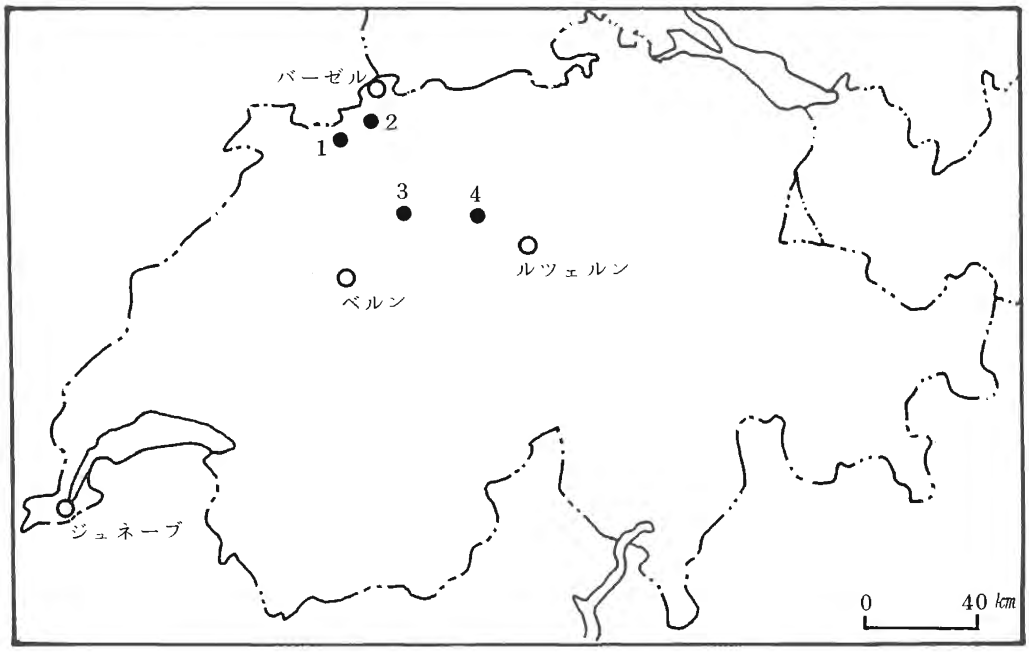
逆刺をもった、きっ先、所謂銛（Harpune）は、ヨーロッパでは、中期マドレーヌ文化にまず出現し、中石器時代に様々の場所に現われ、終局は新石器時代においてもみられるが、本論では、この銛に関する広範囲の問題の中から、部分的な局面だけを選び出さねばならない。即ち、スイスにおけるように、狩猟文化の晩期と初期農耕文化とが、あちこちで時期的共存に至り得るところで、はたして、中石器時代住民から新石器時代住民へとこれら銛のタイプの伝播が起ったかどうかという問題である。

第一に、J．G．ローツォイ（J.－G．Rozoy）が、銛（Harpune）と呼んだ、逆刺のあるきっ先の様々の変形が問題なのである。なぜならば、「逆刺のあるきっ先」と違って、基部に索縄を固定するための装置（一般に、ライン・ホールかライン・ショルダーを造り出す）が形づくられているからである（Rozoy 1978, S．997）。彼の説からは、彼が、銛については、狩猟と同じく漁撈のための用途も計算に入れているらしいと推定される。木の柄と、その先にゆるく着装した銛頭は、短かい索綱によって結び合わされている。このことは、一つには、きっ先の破損や損失、とくに獲物（例えば抵抗する大きな魚）が逃げ去ることを防ぎ、あるいはまた、当てた獲物を弱らせることにも役立つはずであるという。「逆刺をもった刺突具」においては、ローツォイは、中石器のものは、後期旧石器の槍先と同等のものとみなしており、それが中石器時代に盛行したとしている。しかし、銛が、稽以外の目的で使用された可能性を想定することは、殆どできないのではなかろうか。それゆえ、ここで論じられる道具に関しては、"銛"について全く論じないのも良策と思われる。なぜなら、各々の場合の用途は、北極地方で海獣猟に用いられた道具とはっきり異なるからである。しかし、銛（Harpune）という術語は、後期旧石器時代の終わり以来出現してきたタイプに対応するもので、長く馴じんできたので、筆者は、北極地方における冠状銛（Kopfharpune）に対して有柄銛（Stab harpune）とすることで、甘んじるべきであると思う。ついでながら言えば、E．フォークト（E．Vogt）は、スイスでは角、あるいは青銅製の遺物のタイプが存在し、全く冠状銛に相当するものだと、大分以前から指摘している。彼は、これらの道具が、大きな魚の捕獲に使われたと仮定し、新石器時代の遺跡にみられないことを、ことさら強調した（Vogt 1947, S．53－56）。

すでに、スイスからは、かなりの数の中石器時代の有柄銛が出土しているのである。遺物の中では僅かな数量だが、ジュラ地方で多くみられる。それについて、とりわけ、ビルスマッテンーバ

ーシスグロッテ（Birsmatten-Basisgrotte）とリースベルクミューレⅥ（Liesberg mühle Ⅵ）について触れておこう（この二つの文化期は、バーゼル（Basel）とデールスベルク（Delsberg）の間にあるビルスタール（Birstal）に存在する）。また、グレリンゲン（Grellingen）のヴァハトフェルセン（Wachtfelsen）文化についても有効である。そこからは、一層整った有柄銛が出土している。ジュラ山脈の外側では、今までに、中石器時代のものとみなされた有柄銛は、２点しか知られていない。それらは、ヴァウヴィラーモース地方（Wauwilermoos）とルチェルン州（Kt. Luzern）から出土したものである。

ビルスマッテンーバーシスグロッテの層位は、有柄銛は最上の二層のみで出土したこと、タルドノワ文化的な（Tardenoisien）材質に特徴づけられていることから中石器時代に属することを示している（Bandi 1963；Rozoy 1978, S. 242−251）。これらは、不確実なものが多いのだが、概ね、５０００年B．C．の中頃から３０００年B.C.の前半に年代づけられる。このことは、ビルスタールで、思いのほか長い期間、中石器的狩漁が続いたことを示している。とくに豊富な量の、完存、破損の有柄銛が、リースベルクミューレⅥ遺跡（ビルスタール地方のリースベルク村）に埋存していた（Hofmann-Wyss 1978）。洞穴の北半において、上部の二つの中石器文化層から全部で２５個の遺物が出土した。C^{14}年代は５０００年B．C．の後半を示している。もちろんリースベルクミューレⅣの層位的な攪乱のため、異論がないわけではない。



第１図　銛頭を出土したスイス中石器時代の遺跡
1. リースベルク　2. グレリンゲン
3. ゼーベルグ　4. ヴァハトフェルセン

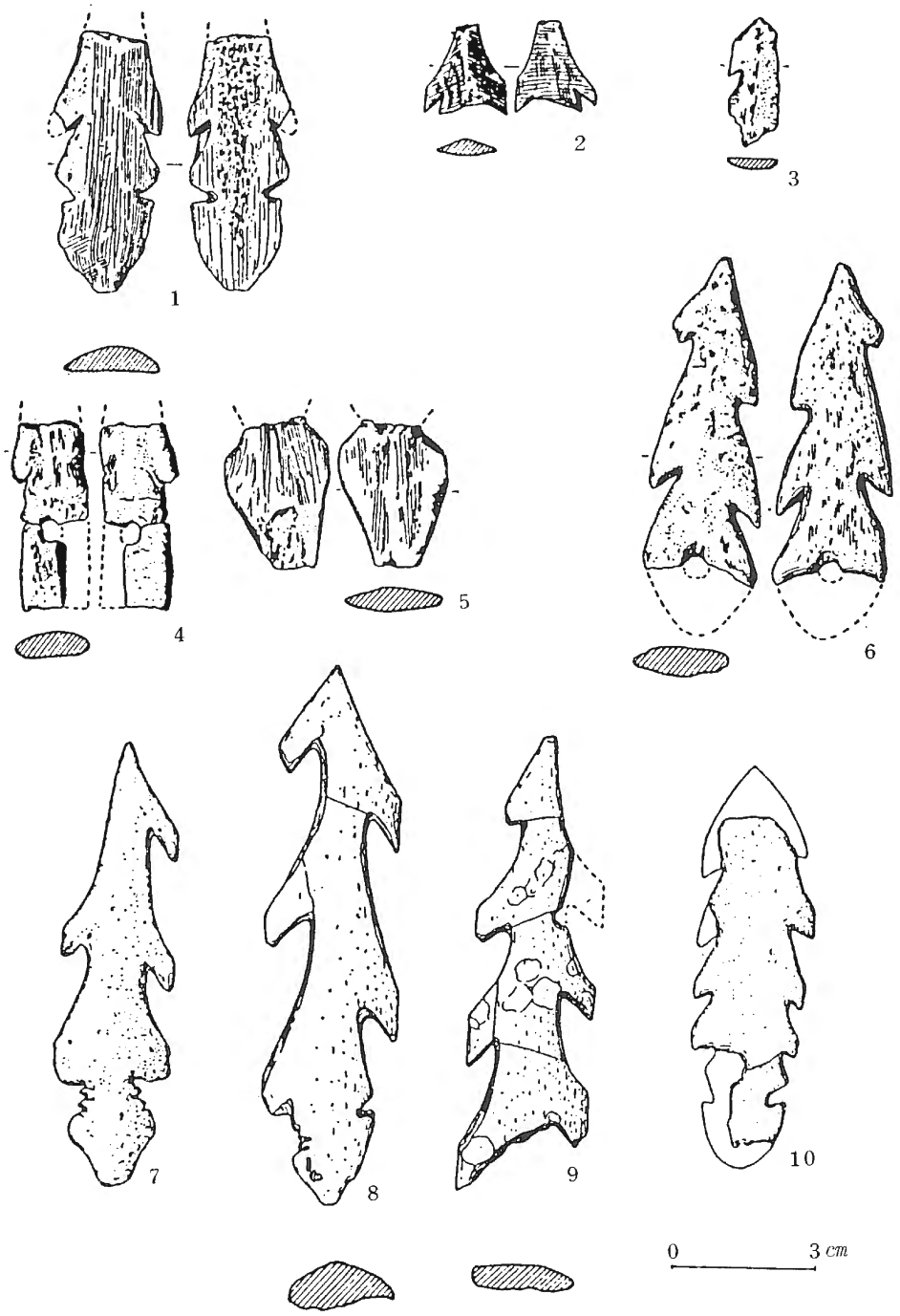
とくに入念に加工された有柄鋲はグレリンゲン付近の所謂ヴァハトフェルセンの山麓、ビルスマッテンーバーシスグロッテの谷をやや上ったところで発生した。「その遺物については、中石器時代の新しい時期の層から出土した（Lüdin 1960／1961, S. 17）」。それらは、ビルスマッテンとリースベルクミューレVIの鋲にタイプが似ている。

ビルスタール出土の鋲と比較され得るものは、これもスイス中部、ルツェルン州、ヴァウヴィラーモースのSchötz 7 遺跡出土の標品（欠損品）である（Wyss 1968, S, 138）。それに対して、そこからさして離れていない地域から発見された標品で、フォークトが「中石器時代の鋲」としてかつて発表したもの（Vogt 1952）は、全く破格品である。長骨幹部からつくられているこのきっ先は、ほとんど刻み目のような弱い逆刺しかもっていない。出土状況はあまりはっきりしていないので（近くに、新石器時代の遺跡 Schötz 1 があり、よく似た標品が1点、新石器から、後期のコルテヨ 文化（Cortaillod）に属しているゼーベルク／ブルゲッシゼー南西（Seeberg／Burgäschisee - Südwestにおいて出土している（Wyss 1966, S. 17）のではあるが）、マグレモーゼ文化期の資料であることの根拠とした推定年代は、やや疑わしいかもしれない。

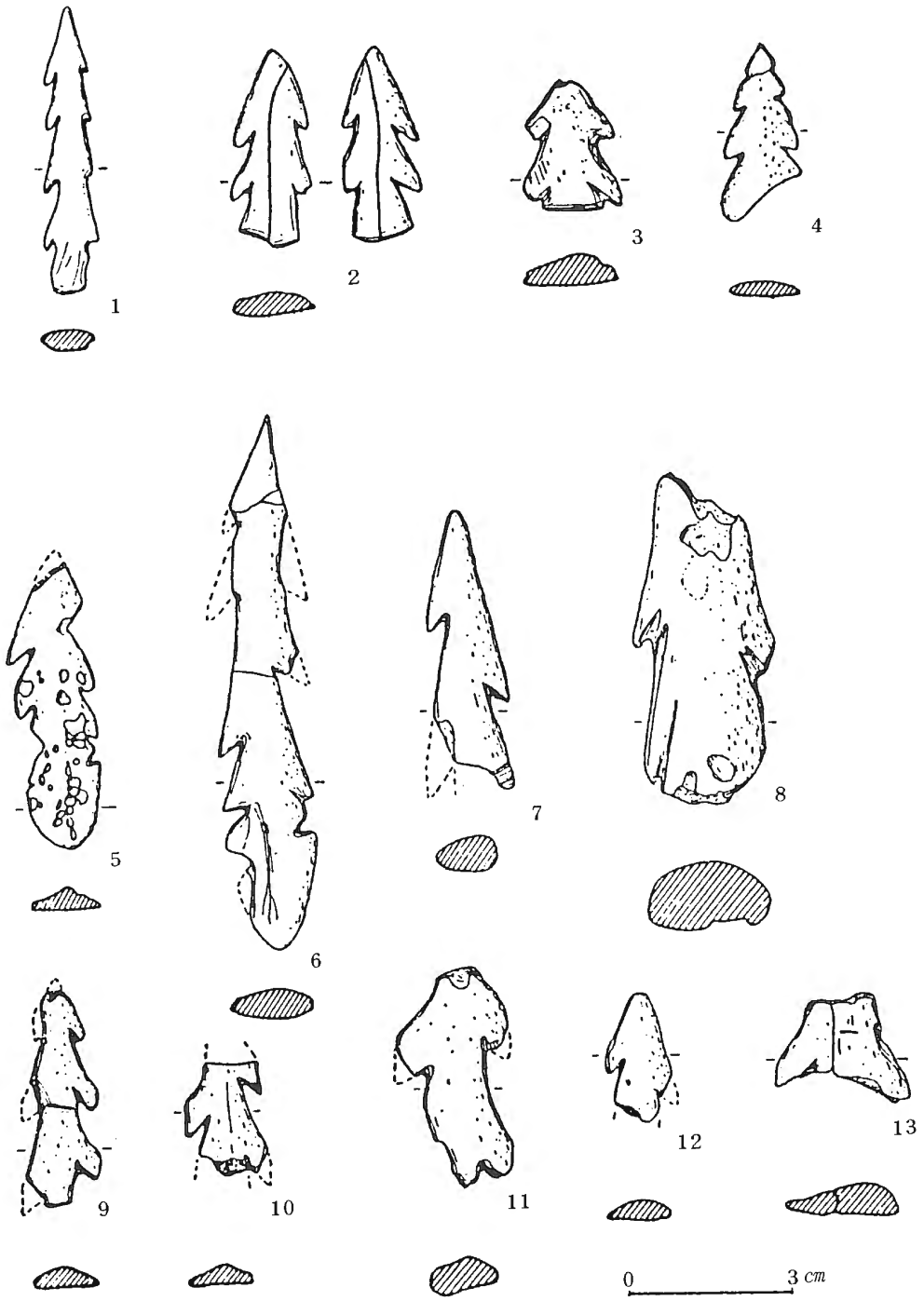
ここで、スイスの新石器時代の有柄鋲へと論を進めよう。これら鋲については、H.シュヴァープ（H. Schwab）が当然にも言ったように、従来、殆ど注意が払われてこなかったのみである（Schwab 1970）。彼女は、その理由として、これらのタイプの数が僅かしか知られていないこと（海岸集落毎に、通常1、2点、例外的に7個という例があるにすぎない）を指摘している。それでもなお、シュヴァープは西スイスの中部地方で、すでに4つの新石器時代の有柄鋲の変型に分けられると考えた（ヴィス<Wyss 1966, S. 10>の把握と対比している）。そして、これらは、特定の文化複合によって生成し得ると考えている。シロの枝角や、骨でできた新石器時代の有柄鋲の4変型とは、以下のようにまとめられよう。

(1)大きく、長いもの。非対称に整形された丈夫な逆刺をもつ。(2)大きく、長いもの。ほとんど目立たないが、やはり非対称に整形された逆刺をもつ、(3)短いもの。2～4個の非対称に整形された逆刺をもつもの。(4)短く、巾広のもの。片側に逆刺をもつ。

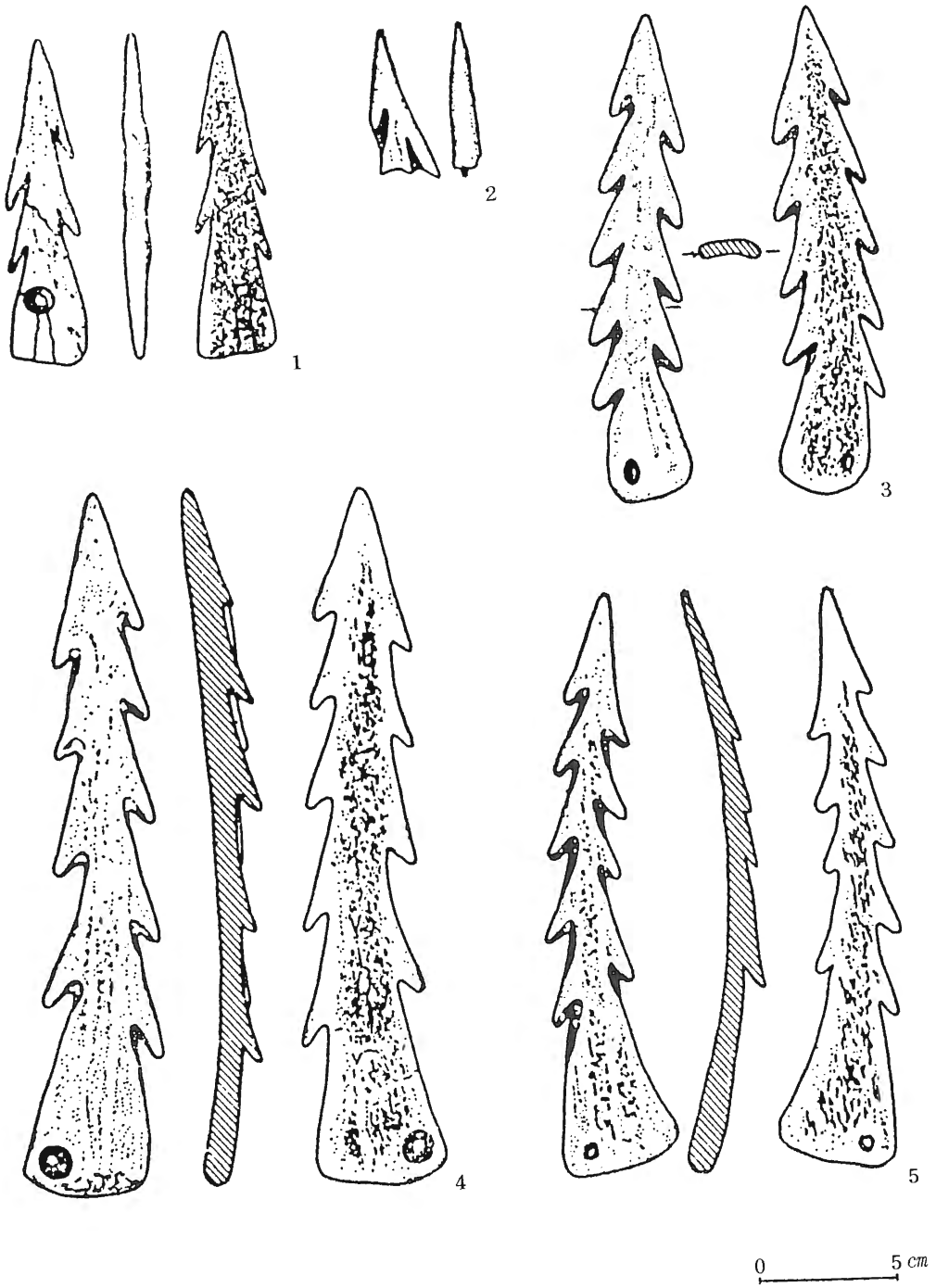
シュヴァープは、(1)をコルテヨ文化と関係させた（精確に、旧新どの形相に関連するかをいうことはできないにしても）。しかも注意をひくことは、平板なシャベルの形をした基部が、両側から刻みをいれるか、一孔を穿つことにより形づくられていることである。(2)の骨製鋲は、コルテヨ文化後期に盛行する。また、さらに東方の、フィーナー文化（Pfyner Kultur）においても代表的な型である。(3)は、西スイス、ホルゲナー文化（Horgener Kultur）との境界あたりからも出現する。それに対し、(4)は、他の型と確実に並列させてあつかうことが、今まではできなかった。シュヴァープによれば、西スイスの新石器時代の有柄鋲は、大きさや、一部には周辺部を非常に入念に加工したものがあることなどからみると、中部ヨーロッパの中石器



第２図　スイス出土の中石器時代有柄鋸
１～６　ビルスマッテン・バシスグロット出土　１～３　Horizont 1
４～６　Horizont 2　7.　グレリンゲン－ヴァハトフェルセン出土
８～10　リースベルグミューレ出土
１～６：Bandi 1963による　７～９：Hofmann Wyss 1978による
10：Wyss 1966による



第3図　スイスの中石器時代有柄鋸
1～13　リースベルグミューレVI
（Hofmann Wyss 1978）



第4図　スイスの新石器時代有柄鋸
1、4　フォロント　3.　ムンテラー　5.　フォレル（フライブルク州）
Schwab 1970による

時代に共通する型から、明らかに区別されるという。

これらから、スイスにおける中石器時代の有柄銛から新石器時代の有柄銛への派生はあり得たかという終局の問題に行きつくのである。R．ヴィスによれば、「型式的には〔中略〕新石器時代の銛が、晩期中石器時代の銛の範疇から派生したということは、大変蓋然性があるようにみえる。こうした把握は、ビルスマッテンの中石器時代の銛のタイプBの年代測定を通して裏づけられよう。これらは、３０００年B．C．の中葉までさかのぼる。これにより、すでにE．フォークトによって公表された推測もまた確証される。即ち、『スイスに最初の農耕民が入植するようになった時代でもなお、中石器文化の狩猟民は、耕作には不利な土地に移ることで、存続することができた』」というものである（Wyss １９６６, S．１７）。こうした定義は、ヴィスが以下のように仮定したことを推測させる；スイス新石器時代の有柄銛の出現は、中石器時代の残存部族である狩漁民との空間的接触に帰因する。しかし、この友好的な新石器時代人と中石器時代人との行動圏の重なりは不可能である。これと同様のことを、M．メンク（M. Menk．１９７８）もまた主張している。すべての部分的成果を総合すると、アルプスの北側山麓の南部（基本的にユングモレーネJungmoräneの周辺とショター平野Schotterflächeの対岸によって構成されている）地方においては、先土器的新石器時代が次のような状態であったことを首肯させてくれる—どうみてもタルドノワ文化的性格を帯びること、すでに石器を知っていること、家畜は全く無いか、あっても一種に限られる、穀物を植え付ける—という状況である。初期新石器時代には、帯文土器（Bandkeramik）の北方的様相と同時代的である一方、純粋に中石器時代的社会組織も存在した。」　メンクはさらに、南部地方の西方では、帯文土器を伴う古い新石器時代的様相は顕著であると強調している。さらに「北アルプス地方の北側山麓地方とアルプスの南部では、タルドノワ文化的な晩期中石器文化及びそれと同時存在の初期新石器文化との間の文化接触が証明できると強調した。他方、別の地域（例えばバーゼルの南のビルスタールのビルスマッテンのような）では、新石器時代の中にまでずっと、隣人関係を保ちながら、適合した中石器文化が存続することができた。

例えば、ビルスマッテンの最上の二つの層の年代が不確実であることは、すでに、指摘されていることである。Horizont 1 の二層（いまだタルドノワ的遺物が分布する）から発見されたRössener の破片１片は、絶対的ではないが、地つきの中石器時代民と新しく移入してきた新石器時代民との接触を指摘するのである。ここの層の範囲では表面近くは攪乱がみとめられ，さらに新しいもの、現代のものまで発見されている。

また他方、ゲルスバッハ（Gersbach １９５６, S．２２６）は、南ドイツのヴァルトシュット（Waldshut）付近のグリセン（Grissen）出土の帯文土器の小目録を出版したが、その中に、ビルスタール出土の中石器的有柄銛と類似する晩期中石器的特徴をもつ有柄銛の基部１点も載っていた。このことは、タルドノワ的文化の担い手と帯文土器の代理人との接触の可能性、あ

るいは真実性に関する指摘である。しかし、上記のことからは、コルテヨ文化の比較的古い（あるいはかつ)、新しい特徴をもつ有柄鋲の発生が、あるいはフィーネル文化、ホルゲナー文化、さらにまた、スイスの他の新石器時代の部族におけるその発生が、こうした方法で成り立つということは、確実には推論され得ない。中石器時代の残存部族を通じての初期農耕民への局部的影響を証明する根拠は何もないのである。単純鋲のまぎれもない類似性は、すでに言ったように、スイスの新石器時代に頻繁に現われたとは言えない。（ジュラ地方の中石器狩漁民のもつそのような鋲との）こうした類似性は、すでに、早く、そしてスイス以外で、対応する接触がおこっていたことに帰因すると思われる。中石器時代の有柄鋲のタイプが、新石器時代人達によって受け継がれた証拠が他の場所でも生起し得たかどうかは、今のところ不明である。中石器時代の先駆者から新石器時代の有柄鋲が派生したことが、タイプの類似性に基づくことは妥当性がある。スイスでは、しかし、個々についてみると、直接的派生を考え得るには、ジュラ地方の中石器の有柄鋲と、中部地方の新石器文化のそれとの相違が、余りに大きいのである。

LITERATUR

Bandi H.-G. (1963), (Herausgeber), *Birsmatten-Basisgrotte. Eine mittelsteinzeitliche Fundstelle im unteren Birstal*, Bern.

Gersbach E. (1956), *Ein Harpunenbruchstück einer Grube der jüngeren Linearbandkeramik* (bei Griessen, Ldkr. Waldshut), „Germania", Jahrg. 34, S. 266 ff.

Hofmann-Wyss A. B. (1978), *Liesbergmühle VI, Eine mittelsteinzeitliche Abrissation im Birstal*, Bern.

Lüdin C. (1960/1961), *Mesolithische Siedelungen im Birstal*, „Jahrbuch der Schweiz. Gesellschaft für Urgeschichte", Bd. 48, S. 11—27.

Menke M. (1978), *Zum Frühneolithikum zwischen Jura und Alpenrand*, „Germania", Jahrg. 56, S. 24—52.

Rozoy J.G. (1978), *Les derniers chasseurs. L'epipaléolithique en France et en Belgique*, Tome I—III, Charleville.

Schwab H. (1970), *Hirschgeweihharpunen aus jungsteinzeitlichen Fundstellen des Kantons Freiburg*, „Jahrbuch der Schweiz. Ges. für Ur- und Frühgeschichte", Bd. 55, S. 7—12.

Vogt E. (1947), *Zum Problem des urgeschichtlich-völkerkundlichen Vergleiches*. In: *Beiträge zur Kulturgeschichte. Festschrift Reinhold Bosch*, Aarau.

Vogt E. (1952), *Eine mesolithische Harpune aus Schötz (Kt. Luzern)*, „Jahrbuch der Schweiz. Ges. für Urgeschichte", Bd. 42, S. 155 ff.

Wyss R. (1966), *Mesolithische Harpunen in Mitteleuropa*. In: *Helvetia Antiqua, Festschrift Emil Vogt*, S. 9—20, Zürich.

Wyss R. (1968), *Das Mesolithikum*. In: *Ur- und Frühgeschichtliche Archaeologie der Schweiz*, Bd. 1, Basel.

HANS-GEORG BANDI (BERN)

MESOLITHISCHE UND NEOLITHISHE STABHARPUNEN DER SCHWEIZ

Problèmes de la néolithisation dans certaines régions de l'Europe, Kraków 1980
ISSN 0079-3256
ISBN 83-04-00519-0